

Allan Holdsworth  
Japan Tour '84

# Alan Holdsworth

5/8(火)名古屋・芸術創造センター

9(水)大阪・御堂会館

11(金)東京・郵便貯金ホール

14(月)東京・郵便貯金ホール

*The one place I want to go most*

*Japan*

*XX  
XX*

*Alan*



Allan Holdsworth



**U.K.**



**Allan**      **Bill**      **John**      **Eddie**  
**Holdsworth**   **Bruford**   **Wetton**   **Jobson**



**Dave Stewart · Bill Bruford · Jeff Berlin · Allan Holdsworth**



**BRUFORD**



Allan Holdsworth 略歴

- 1967 { Glen South Band
- '68 ↓
- '69 Leggin Bottom
- ↓
- ? Kinkade  
Sunship
- ↓
- '72 Nucleus
- ↓
- June '72 { Tempest
- July '73 ↓
- Nov '73 { Soft Machine
- Mar '75 ↓
- '75 New Tony Williams'  
Lifetime
- '76 ↓
- Solo Album
- ↓
- '76 Gong
- ↓
- Esther Phillips
- ↓
- Jean Luc Ponty
- ↓
- John Stevens (Plough)
- '78 Ray Warleigh/Allan Holdsworth Band/  
Bill Bruford  
etc
- ↓
- July '78 { UK
- Nov '78 ↓
- Nov '78 { Bruford
- May '79 ↓
- Fall '79 Jack Bruce, Jon Hisemanらとトリオ結成。レコード・デビューできず解散
- '79 ↓
- { Ray Warleigh, John Stevens, Gordon Beck, Turning Point, Nucleusらと  
'80 gig. Tourを行なう
- ↓
- '80 Allan Holdsworth & FriendsまたはFalse Alarmというバンド結成
- ↓
- I.O.U.

この間セッション多数

この間にもGong  
Ray Warleigh, John Stevens 等とのセッションを時々やっている



●Allan Holdsworth & Friends early 1980

- Allan (g)
- Gary Husband (ds)
- Henry Thomas (b) → Neil Murray (b)

●Allan Holdsworth & Friends/False Alarm ⇒ IOU #1 '80~'81

- Allan (g)
- Gary Husband (ds)
- Paul Carmichael (b)
- Dave MacRae (key) → Paul Williams (vo)

●IOU #2 '82

- Allan (g)
- Gary Husband (ds)
- Paul Williams (vo)
- Jeff Berlin (b)

●IOU #3

- Allan (g)
- Chad Wackerman (ds)
- Paul Williams (vo)
- Jeff Berlin (b)

●IOU #4 '84

- Allan (g)
- Chad Wackerman (ds)
- Paul Williams (vo)
- Jimmy Johnson (b)

★プログレッシブ・ミュージックを語る時、アラン・ホールズワースなくしては語れない。ホールズワース・フリースとも言われる(プロアマ問わず)熱狂的な支持層を持ち、「ギターの神格」「最高のギタリスト」「ミュージシャンズ・ミュージシャン」等と呼ばれ、無類の存在になっている。かつてサウンドのバイオニック的存在だったテンペスト、ソフト・マシーン、トニー・ウィリアムス＆ニュー・ライフタイム、ゴング、そしてU.K.等のジャズ・ロック・グループに在籍して活躍し、さらにジャン・リュック・ボンティヤビル、ブラッフォード等との数多くのレコーディングでその比類なきハイテクギター奏法を展開した。

エドワード・ヴァン・ヘイレン、ジャーニーのニール・ショーン、カルロス・サンタナ等、彼を讃えるギタリストや評論家は数多くいる。

「世界で最高の、そして最も独自のギタリストの1人だ。」  
ザ・ギター

「アランは、かつてない最高のギター・プレイヤーだ。」  
ミュージシャンズ・オンリー

知性と感性を備え、テクニック、センス、スピード、そして歌心のあるギタリスト、アラン・ホールズワース!

今回の来日で、あらゆる音楽へ挑戦し続ける彼のパッションが、ファンを打ちのめすだろう。

## 来日メンバー

### Paul Williams(vo.) ポール・ウィリアムス

72年結成のテンペスト以来のアランの親友で、バンドL.O.U.のメンバーでもあり、「L.O.U.」「ロード・ゲームス」のレコーディングにも参加。

### Chad Wackerman(dr.) シャド・ワッカーマン

元 フランク・ザッパ・バンドのドラマー。

### Jimmy Johnson(b.) ジミー・ジョンソン

ジャズセッションに数多く参加。ジェフ・バーリンに変わって最近のアランのツアーに同行している。

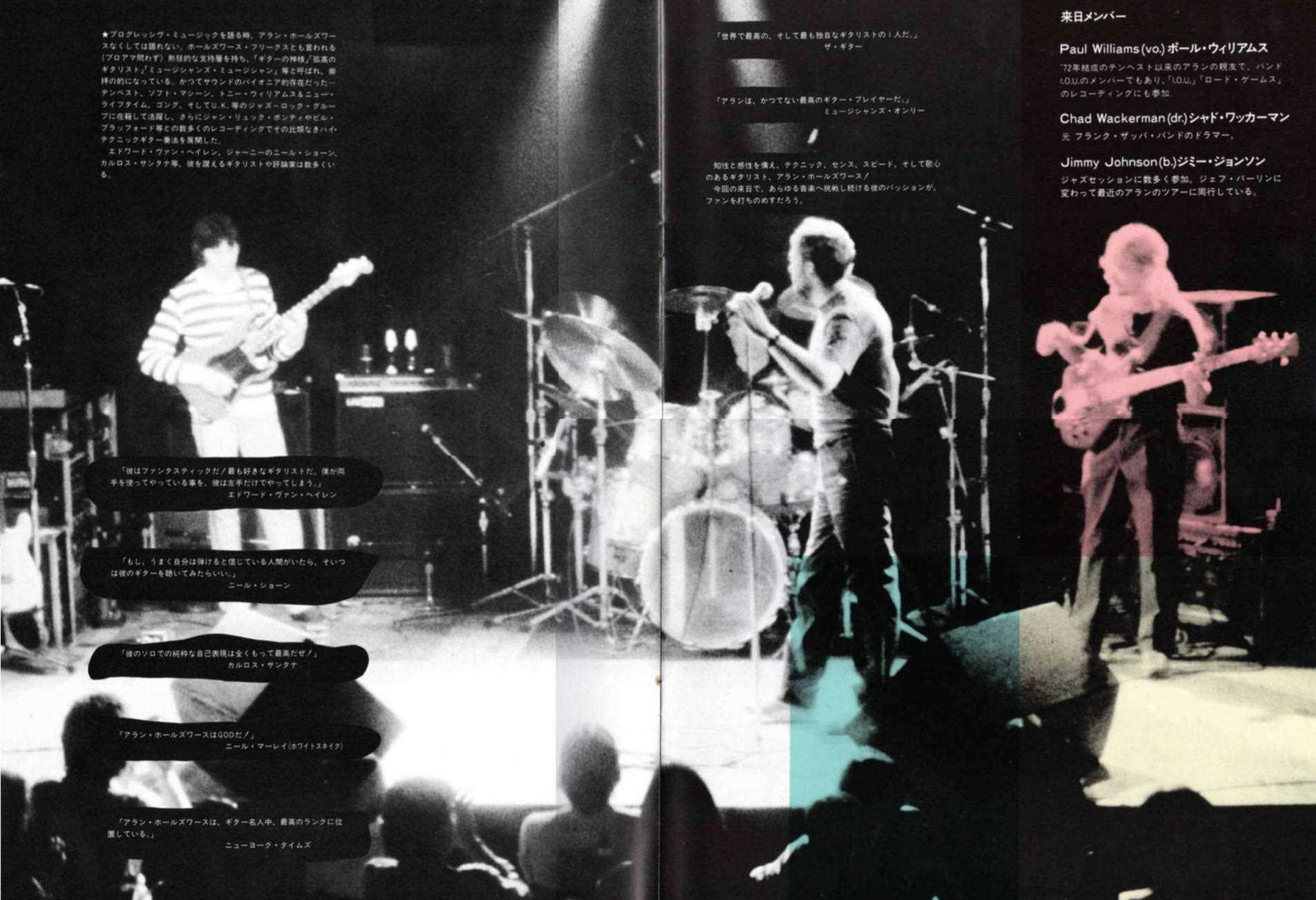
「彼はファンタスティックだ/最も好きなギタリストだ。僕が同平を使ってやっている事を、彼は左手だけでやってしまう。」  
エドワード・ヴァン・ヘイレン

「もし、うまく自分は弾けると信じている人間がいたら、そいつは彼のギターを聴いてみたらいい。」  
ニール・ショーン

「彼のソロでの純粋な自己表現は全くもって最高だぜ!」  
カルロス・サンタナ

「アラン・ホールズワースはGODだ!」  
ニール・マーレイ(ホワイトスナイク)

「アラン・ホールズワースは、ギター名人中、最高のランクに位置している。」  
ニューヨーク・タイムズ





## Allan Holdsworthの軌跡

1948年8月6日、イギリス、ヨークシャー州ブラッドフォードに生まれたALLAN HOLDSWORTHは父親がジャズ・ピアニストだった関係で幼少の頃からジャズ・ミュージックに親しみ、16才の時、初めて手にしたギターと後に手にしたヴァイオリンで、熱心にジャズのコピーを始める様になった。

'67~'68頃GLEN SOUTH BANDでセミプロとしてデビュー後、マンチェスターに移り、IGGIN BOTTOM に加入。'69年念願のデビューアルバム『IGGIN BOTTOM'S WRENCH』をリリース。しかし大きな成功を得るには至っていない。この時代に知り合ったサクソ奏者RAY WARLEIGHを頼ってロンドンに出たALLANはセッション等の仕事を始める様になる。

そんなALLANが注目され始めたのは'71年9月、何気なく出演した『ロニー・スコットフェスティバル』で金賞を勝ち取った頃からである。既に独自の奏法を確立していた彼は、当時殆んど無名だったにも関わらず、様々な人々から絶賛を浴びたのである。

この後、KINKADE、SUNSHIP等のセッションを経て'72年、ブリティッシュ・ジャズシーンの雄、NUCLEUSのリーダー、IAN CARRのアルバム『BELLADONNA』及びNUCLEUSの全英ツアーに参加。夏には、スーパーグループ、COLOSSEUMを解散させたドラマー、JON HISEMAN率いるTEMPESTに加入、アルバム『TEMPEST』を発表した。メンバーは、ヴォーカル及びキーボードにPAUL WILLIAMS (元JUICY LUCY、今回の来日メンバー)、ベーシストにMARK CLARKE (元COLOSSEUM、URIAH HEAP)そしてギターとヴァイオリンのALLANとJONという顔ぶれであった。アルバム発表後、元PATTOのギタリストOLLIE HALSALL (後にBOXER KEVIN AYERS等)が加入し、ツイン・リードとなるが音楽的意見の相違等で、73年6月にPAULが脱退。7月にはALLANもバンドを去り、TEMPESTは以後トリオとして活動していくこととなる。ちなみに、ALLANがトレ

モロ・アームを使う様になったのは此頃からで、OLLIEの影響が大きいと言われている。

TEMPEST脱退後、様々なセッションを重ねるうち、クリニックで知り合ったドラマー、JOHN MARSHALLの誘いで、'73年秋には、ブリティッシュ・ジャズロックの最右翼、SOFT MACHINEに加入。しかし'75年4月、名作『BUNDLES』のリリースと前後してグループを去り、フリージャズのJOHN STEVENSや元NUCLEUSのGORDON BECK等とレコーディングセッション等を行っている。そしてCHUCK MANGIONEのイギリスツアーの際に知り合ったALPHONSE JOHNSONの紹介でアメリカに渡り、TONY WILLIAMS率いるNEW LIFETIME 結成に参加することになる。アルバム『BELIEVE IT』『MILLION DOLLAR LEGS』を発表、ツアーにも同行した。

この頃ジャズ・レーベルCTIの社長、CREED TAYLORに絶賛され、CTIと契約を結び、初のソロアルバムをレコーディングするが、ALLANのコンディションは最悪で、不本意な出来となる。『VELVET DARKNESS』と銘打たれたこのアルバムには、サイドメンとして、前記のALPHONSE JOHNSON (ベース、元WEATHER REPORT)、NARADA MICHAEL WALDEN (ドラムス、元MAHAVISHNU ORCH.)そしてNEW LIFETIMEのメンバーALAN PASQUA (キーボード、後にBOB DYLAN等)を迎えている。同時期、ブルース・ジャズ・シンガー、ESTHER PHILLIPSのアルバム『CAPRICORN PRINCESS』にも客演している。

'76年バンドとしては上手く行っていたNEW LIFE TIMEが自然消滅してしまい、イギリスに戻ったALLANは、7月に大巾なメンバーチェンジを行なったGONGのアルバム『GAZEUSE』に参加するがすぐに脱退。アメリカで、JEAN LUC PONTYの『ENIGMATIC OCEAN』のレコー



ディングに参加する。この時のメンバーの中には、後に GENESIS に加入する DARRYL STURMER や JOURNEY で名声を博す STEVE SMITH 等が居た。

'77年初頭、ALLAN は、NATIONAL HEALTH を脱退し、JOHN WETTON/RICK WAKEMAN とのトリオを畳んだ BILL BRUFORD の誘いを受け、彼のソロ・プロジェクト、BRUFORD に加わる。このプロジェクトのメンバーは超豪華で、彼ら他、キーボードに DAVE STEWART (元 NATIONAL HEALTH、HAT FIELD & THE NORTH)、ヴォーカルに ANNETTE PEACOCK (元 PAUL BLEY)、ベースに、JEFF BERLIN (元 GIL EVANS ORCH. 等、後に I.O.U. にも参加) そしてゲストとして、フリューゲル・ホーンの KENNY WHEELER (GLOBE UNITY ORCH.) やギターに JOHN GOODSALL (BRAND X)、ベースの NEIL MURRAY (元 NATIONAL HEALTH、現 WHITE SNAKE) も参加。リハーサルの後、NEIL を除くメンバーで、アルバム "FEELS GOOD TO ME" を発表している。ALLAN はその後再び、GONG のアルバム "ESPRESSO II" にゲスト参加。この間も、RAY WARLEIGH や JOHN STEVENS 等とギグ等を行っている。

'78年7月、JOHN WETTON (ベース、元 KING CRIMSON、ASIA) と BILL BRUFORD (前出: ドラムス、現 KING CRIMSON) が長年構想を練っていたスーパーグループ UK を元 CURVED AIR、ROXY MUSIC を経て来たキーボード/ヴァイオリン・プレイヤー、EDDIE JOBSON と共に結成。ALLAN も前のプロジェクトの縁で参加、デビューアルバム "U.K." をリリース、英米をツアーしている。(尚このファーストツアー中、既にセカンドアルバム "DANGER MONEY" に収録されている曲を演奏しているが、アルバムとはかなりアレンジが異なったものとなっている)。しかし、ツアー終了後、音楽的意見の対立から BILL と共に UK を脱退、前出の BILL のソロ・プロジェクトを再開し、BILL、ALLAN、DAVE、JEFF の4人のメンバーで "ONE OF A

KIND" を発表する。だが結局 '79年春、このプロジェクトからも抜け、元 CREAM のベーシスト、JACK BRUCE、元 TEMPEST のドラマー、JON HISEMAN とトリオを組むが、レコード会社に受け入れられず、また、セッション、ジャムの道に入ることになる。JOHN STEVENS' PLOUGH、GORDON BECK OCTET、NUCLEUS、TURNING POINT 等のツアーに参加し、GONG のアルバム "TIME IS THE KEY"、GORDON BECK の "SUN BIRD"、"THE THINGS YOU SEE"、SOFT MACHINE の "LAND OF COCKAYNE" 等でプレイしている。

'80年頃から ALLAN は友人のドラマー GARY HUSBAND と自己のバンドを模索し始める。ベーシストのオーディションを繰り返す、まずは元 GINGER BAKER BAND の HENRY THOMAS を起用した。ところが、このプロジェクトはミュージシャンユニオンの関係で実現せず、既に決っていたドイツ・ツアーには丁度 WHITE SNAKE がオフだった NEIL MURRAY が同行するというハプニングも行った。紆余曲折を経て、結局ベーシストは PAUL CARMICHAEL に決定。元 NUCLEUS 等のキーボードプレイヤー、DAVE MACRAE 等と ALLAN HOLDSWORTH & CO., HOLDSWORTH & FRIENDS、FALSE ALARM 等の名でライブハウスに登場する様になる。(この間も色々なセッションは行なわれている) このバンドから MACRAE が抜け、TEMPEST 時代の友人 PAUL WILLIAMS が加入し、ここに I.O.U. の基礎が出来上がる。この頃 ALLAN の財政状態は最悪で、生活のため全てのギターを売り払い、借り物のギターでステージを務めたこともあるという。

しかし、友人達の協力を得て、'82年にはアメリカで自主制作アルバム "ALLAN HOLDSWORTH I.O.U." をリリース。特に日本の輸入レコード店でベストセラーを記録することとなり、一躍 ALLAN ブームが興ったのである。

'82年7月24日、スイスで毎年行われている「モントルー・フェスティバル」で一寸し

た事件があった。スーパー・セッション・プロジェクト GATHERING OF MINDS に ALLAN が参加したのである。メンバーは強力で、ドラムスに BILLY COBHAM、キーボードに DAVID SANCIOS (元 BRUCE SPRINGSTEEN、JON ANDERSON BAND 等)、ボーカルとベースに JACK BRUCE、そしてヴァイオリンに DIDIER LOCKWOOD (元 MAGMA) といった面々で、"IMAGINARY WESTERN" 等が演奏された。この模様は日本の FM でも放送されたので、聞いた人も少なくないだろう。

'82年後半、昔から熱狂的な ALLAN フリークだった EDWARD VAN HALEN は、彼の窮状を知り、援助を申し出た。彼のサポートで、ワーナーブラザーズと契約した ALLAN は JEFF BERLIN、JACK BRUCE、PAUL WILLIAMS といった息の合った仲間と3枚目のソロアルバム "ROAD GAMES" をリリースした。(ちなみにこのアルバムは今年のグラミー賞ロックインストゥルメンタル部門にノミネートされるという快挙を成し遂げた。)日本に行くことを熱望していた彼は、インタビューで、「僕は何よりも日本に行きたいと思っている。"ROAD GAMES" の中の "TOKYO DREAM" は日本に行きたいという僕の夢を歌ったものだ。日本でも人気が出れば行けるんだけど…日本にはまだ行ったことがないから…」と語っている。

日本にも彼の信奉者が多いことは、今回の初来日公演のチケットの売れ行きを見ても明らかだろう。

LADIES & GENTLEMEN、PLEASE WELCOME.  
ALLAN HOLDSWORTH !!

西岡敏彦

監修: UKファミリー・ファンクラブ/  
BRUFORD-STEWART CONNECTION.

THE  
Lighthouse  
Cafe



## THE THINGS I SAW——

### ALLAN HOLDSWORTH

#### との遭遇

山崎明美

もう3年も前のことになる。1981年3月。私はようやく長年の夢だった英国の土を踏んだ。すぐに買いこんだ情報紙・音楽紙類をチェック。何かいいコンサートはないものかと必死で探す私の目に真先に飛び込んで来たのは、COVENT GARDENにある“SEVEN DIALS JAZZ CLUB”の広告だった。3月12日、元NUCLEUSやBARBARA THOMPSON'S JUBIABA等に居たトロンボーン奏者・DEREK WADSWORTHのバンドのコンサート。ゲストにALLAN HOLDSWORTH、RAY WARLEIGH (サクソ奏者)等の名がクレジットされているではないか！目に止まったコンサート告知はそれだけではなかった。14日の土曜にはALLAN自身のバンドがCLAPHAM JUNCTIONにある“101CLUB”に出演と書いてある。私の興奮がおわかり頂けるだろうか。別にそれと知ってロンドンに来た訳ではないのだ。何という偶然。何という幸運！

日程の都合でDEREK WADSWORTHバンドの方は涙をのんで諦め、ひたすら14日を持った。前座が始まるのが夜8時とのことだったので8時5分前には友人と101CLUBに到着。これから実際にALLANが見れるのかと思うともう本当にドキドキだった。料金2ポンド也(約700円)を払って中に入る。あまり日本のライブハウスと変わりはないが、機材や内装が貧弱だったのが印象的だった。丁度、高校の教室をふたまわり位大きくした場所の端に、まるで教壇のような高さのステージ、ステージ横に積みあげられたビール箱。椅子は壁際に少しだけ。大半は床に座るか、立って見るかといった感じである。NUCLEUSのリーダーのIAN CARRが向こうの端に座っていた。(注1)

前座が始まる頃には殆どお客はいなかったのだが、メインのALLANのバンド“HOLDSWORTH & CO.”(注2)が出る頃までにはフロアは身動き出来ない程の人で埋っていた。セ

ッティングは20分程。(後で気付いたのだが、実はセッティングをしていたのはALLAN本人だったのだ。)青いシャツを着たALLANがギターを手に現れる。ベースのPAUL CARMICHAELやドラムスのGARY HUSBANDとウォームアップしているうちにギグは唐突に始まった。オープニングは、後にアルバム“1.0.U.”に収録される“WHERE IS ONE”2曲めはALLAN自身のボーカルで“THE THINGS YOU SEE”(注3)とてもギターとは思えない音がスピーカーから響いてくる。早弾きというと、普通はギターのハイ・コードの部分でピロピロ弾くというイメージがあるものだが、この人の場合はハイからロウへ、とにかくフレットの上をなめらかに滑っていく。しかも聴いていて何の異和感もないのだ。音が自然に流れていくとも言えよいのだろうか。私は既に圧倒されて声も出ない。

曲紹介もアラン自身。予想通り(といったら怒られるかもしれないが)のロベタで、少しドモリ気味にトツツと喋る。「え…えっと…次の曲はテストというかえっと新しい曲なんで…上手くいくかなあ…」などと恥ずかしそうにマイクに向かって「…えーっと、SHALLOW SEAという曲です。」と3曲めが始まった。ディレイを上手く使った美しい曲だった。“SHALLOW SEA”が終った後、客席の中からジーンズ上下の背の高いオジさんがぬっと立ち、ステージに上り、徐にマイクを手にする。一体何だろうと思う暇もなく曲が始まってしまう。どこかで見た顔だ。そうだ！PAUL WILLIAMSだ。元JUICY・LUCYのシンガーでALLANのTEMPEST時代の僚友のPAUL WILLIAMSだ。’73年にTEMPESTを脱退した後は、余り歌っていなかったとのことで(本屋に勤めていたとか!?)往年のパワフルさは流石になく、少しもの足りない思いをしたが、その後のレコードでは少しずつカンが戻っている様で、日本公

演は十分期待出来ることだろう。

PAUL WILLIAMS はもう一曲歌ってステージを降り、客席に戻る。そして PAUL CARMICHAEL や GARY HUSBAND のソロをフィーチャーした曲や “LETTERS OF MARQUE” 等全 7 曲をプレイしてメンバー紹介後、ALLAN の “BYE” の一言でギグは一応終了。そして一曲アンコール。しかし、超満員の観客は全くおさまらず、“MORE! MORE! WE WANT MORE!” の声が嵐の様に湧きおこり、悩みぬいたあげく、ALLAN 達は、もう一度 “WHERE IS ONE” を演奏したのだった。(レパトリーの少ないバンドは悲しい…。) アンコールを含めても一時間足らずの短いギグだった。

興味のある人も多いと思うので、私のわかる範囲でこの日の機材を思い出してみよう。まず、ALLAN。ボーカルマイクのメーカーは不明。ステージ前の椅子の上に立ててあったことしか覚えていない。ギターは改造ストラトで、色は茶色っぽかった。もちろんアーム付。コルグのポリウムペダル以外は、フットスイッチの類はなく、他には積み重ねられたビール箱の上にチョココンとダイナコードのデジタルディレイが鎮座していた位。アンプはギブソンの LAB を 2 台直列につなぎ、椅子の上にはお気に入りの HARTLY-THOMPSON が一台。以上である。ベースの PAUL CARMICHAEL はミョージックマンらしきアンプとフェンダー系のベースで足元には MXR のエフェクターがあった。GARY HUSBAND のドラムキットは多分グレッツかプレミアだと思う。白状してしまえば ALLAN ばかり見ていたので他の 2 人の機材までははっきり記憶していないのだ。

2 度めのアンコールの “WHERE IS ONE” が好評裏に終了した後、ALLAN 達は何処ともなく引き揚げてしまったのだが、私の幸運はまだ続いた。本当に偶然、楽屋らしきものを見つけてしまったのだ。ドアがあいていたので

恐る恐る中を覗いてみると、PAUL CARMICHAEL がうろうろしている。勇気を出して話しかけ、今日のコンサートがとても良かったと言うと、ALLAN は今奥に居るから彼に会って行きなよと言う。焦る私などお構いなしに「おーい、ALLAN」と ALLAN を呼んでくれる。奥からヒョイ、と顔を出した ALLAN はとてもいい顔をしていた。きっとギグの出来と客の反応に満足していたのだろう。ニコニコ出て来て話してくれた。日本のファンクラブだと自己紹介したら、「EG に会報を送ってくれた UK のファンクラブの人? うわあよく来てくれたねえ」と言われ、またまた感激。サインとメッセージをもらった時、彼がとても真剣に「僕は本当に日本に行きたいんだ。日本は、大好きで、憧れの国で、天候や地理的にも好きなんだ。」と語った GEOGRAPHICALLY という単語が非常に印象的だった。

この日はもう夜遅いからということで、後日約束をしたのだが、ALLAN もギター修理のバイト等で忙しく、結局機会を逸してしまったのが悔まれる。私がロンドンを発つ日に、「今回はゆっくり話せなかったから、今度は是非日本に来て話そうね。」と電話で約束したことが、やっと本当に実現する。

この後、金銭的な面から一度はグループが行き詰まり、生活の為にギターを全て売り払い、奥さんとまだ幼い娘さんをかかえて彼は途方に暮れてしまった。しかも彼から私へのメッセージがたった一言 “HELP!” だったという話を友人から聞いた時は胸がつぶれる思いだった。何もしてあげられない自分がとてもはがゆく悔しかった。だから挫折寸前だったこの窮状から彼を救い出してくれた EDWARD VAN HALEN にはいくら感謝してもしきれない。

今は家族ぐるみでロサンゼルスに引越し、ロスを中心に活動しているという。I.O.U. のメンバーも変わった。PAUL CARMICHAEL がや

め、元 BRUFORD の同僚 JEFF BERLIN が加入し、長年の友人である GARY HUSBAND も元 ZAPPA のテクニシャン CHAD WACKERMAN に代った。今回の来日では JEFF の代りにジャズ系のセッションマン、JIMMY JOHNSON がベースを担当するという。私が 3 年前に見たラインナップから、随分メンバーは変わってしまったが、きっと、ALLAN は、また私達を驚かせる素晴らしいコンサートをやってくれると信じている。目と耳をしっかりと開けて一挙手一投足をも見逃さず、コンサートを堪能したい。

もう私の胸は期待ではち切れそうだ!!

UK ファミリー・ファンクラブ/  
BRUFORD-STEWART CONNECTION 会長

注 1: ALLAN のギグにはミュージシャンが沢山来るので有名で、GARY MOORE、ANDY LATTIMER (CAMEL)、TOMMY SHAW (STYX) PAT METHENY、EDWARD VAN HALEN 等数を上げればきりが無い。ALLAN が MUSICIAN'S MUSICIAN と呼ばれる由縁である。

注 2: この頃 ALLAN は FALSE ALARM、HOLD-SWORTH & CO., I.O.U. という名でギグを行っていたが、これら 3 つのバンドの実態は殆ど同じものである。

注 3: この曲は、ALLAN と、GORDON BECK のデュオアルバム “THE THINGS YOU SEE” の中では “AT THE EDGE” というタイトルになっている曲である。この曲はアルバム “I.O.U.” に収録されている。





## DISCOGRAPHY

Year	Album Title	Artist	Record No.
1969	Iggin Bottom's Wrench	Iggin Bottom	(E) Deram SML 1051 廃
'72	Belladonna 〈ベラドンナ〉	Ian Carr	(E) Vertigo 6360-076 廃 (J) ディスク・ユニオン 6360-076
	Direct Hits	Nucleus	(E) Vertigo 9296-019 廃
'73	Tempest 〈テンペスト〉	Tempest	(E) Bronze ILPS 9220 廃 (J) コロンビア YZ 13 B2 廃 (J) 東芝 WBS 71026 再・廃
'75	Bundles 〈収束〉	Soft Machine	(E) EMI SHSP 4044 (J) 東芝 EMS 80222
	Believe It 〈ニュー・トニー・ウィリアムス・ライフタイム〉	New Tony Williams' Lifetime	(A) Columbia PC 33836 (J) CBS SOPN 169 廃
	Touching On Conversation Piece, Pt. 1&2 〈カンバセーション・ピース〉	John Stevens John Stevens/Gordon Beck/ Jeff Clyne/Allan Holdsworth	(G) Vinyl VS 105 (G) Vinyl VS 0010 (J) ディスク・ユニオン DIW 1022
'76	Million Dollar Legs 〈百万\$の足〉	New Tony Williams' Lifetime	(A) Columbia PC 34263 (J) CBS 25AP245
	Capricorn Princess 〈カプリコーン・プリンセス〉	Esther Phillips	(A) CTI KUDU 31 (J) キング 廃
	Velvet Darkness 〈ベルベット・ダークネス〉	Allan Holdsworth	(A) CTI 6068 (J) キング GP 3086 廃 (J) キング LAX 139 再
'77	Triple Echo Gazeuse [アメリカは違うタイトルでリリース] 〈ガズース〉	Soft Machine Gong	(E) EMI SHTW 800 (E) Virgin V-2074 (A) CBS PZ34428 (J) コロンビア YX 7160 廃 (J) ビクター-VIP 4171 再
	Re Touch 〈リ・タッチ〉	John Stevens	(G) Vinyl VS 0025 (J) ディスク・ユニオン DIW 1045
	Enigmatic Ocean 〈秘なる海〉	Jean Luc Ponty	(A) Atlantic SD 19110 (J) ワナー・バイオニア P-10439
	Feels Good To Me 〈フィールズ・グッド・トゥ・ミー〉	Bill Bruford	(E) Polydor 2302-075 (J) ポリドール MPF-1130 廃
'78	Espresso II 〈エスプレッソ II〉	Gong	(E) Virgin V-2099 (J) ビクター VIP 6913
	U.K. 〈憂国の騎士〉	U.K.	(E) Polydor 2302-080 (J) ポリドール MPF 1169
'79	Time Is The Key Sunbird 〈サンバード〉	Pierre Moerten's Gong Gordon Beck	(E) Arista Spart 1105 (F) JMS 07 (J) ディスク・ユニオン DIW 1004
	One Of A Kind 〈ワン・オブ・ア・カインド〉	Bruford	(E) Polydor POLD 5025 (J) ポリドール MPF 1233
'80	The Things You See 〈ザ・シングス・ユー・シー〉	Allan Holdsworth/ Gordon Beck	(F) JMS 09 (J) ディスク・ユニオン DIW 1003
?	Best Of Tony Williams	Tony Williams	(A) Columbia
'81	Land Of Cockayne	Soft Machine	(E) EMI 3348
'82	I.O.U. (自主制作)	Allan Holdsworth I.O.U.	(A) AH 100
'83	Individual Choice 〈インディビジュアル・チョイス〉	Jean Luc Ponty	(A) Atlantic 80098-1 (J) ポリドール 28M13364
	Road Games 〈ロード・ゲームス〉	Allan Holdsworth	(A) Warner 23958-1 B (J) ワナー・バイオニア P-6194

\*\*\* (E)=England, (J)=Japan, (A)=America, (G)=Germany, (F)=France





Allan

*Holdsworth*

Presented by ONGAKUSHA